

目の前のひとりの生まれてきて良かったを日本の医療から

# JAPAN HEART NEWS



冬  
2023

- 01：カンボジア 「現地医療者の成長」
- 02：ミャンマー 「医療を通じて光を灯す」
- 03：ラオス 「新たな門出」
- 04：国際緊急救援(iER) 「九州北部の豪雨災害で人的・物的支援」
- 05：スマイルスマイルプロジェクト  
「もう一度、思い出の場所につれて行ってあげたい」
- 06：「アジア小児医療センター」建設プロジェクト  
「世界のために、日本のために — 新病院が果たす役割」



## 01 カンボジア 現地医療者の成長

### カンボジア人医療チーム単独での初の小児がん手術

ジャパンハートがカンボジアで運営する病院、「ジャパンハートこども医療センター」。

2016年の開院当初、カンボジア人医療者は看護師と助産師、あわせてわずか8人でしたが、開院から7年経った今では、医師・看護師・助産師などの医療専門家の7割以上、55人がカンボジア人となっています。

この秋、カンボジア人医療者の成長を実感する出来事がありました。初めてカンボジア人だけの医療チームで小児がんの腫瘍摘出手術を実施したのです。腎芽腫という腎臓のがんと闘う5歳の男の子の手術で、カンボジア人の若手医師3名を中心に臨みました。

これまでもカンボジア人医師が小児がん手術を執刀することはありましたが、必ず助手として日本人医師が付き添っていて、カンボジア人だけで完結させたのは今回が初めてです。当日は朝から病院全体に普段とは違う緊張感が漂い、手術の開始後には最高顧問の吉岡秀人をはじめとする日本人医師たちが代わる代わる様子を見に



カンボジア人医師が執刀した小児がん手術（今年9月）

行っていました。そんな心配をよそに、医療チームは落ち着いて進行し、手術は順調に終了。患者さんは今では病棟を走り回れるほどに回復しています。

ジャパンハートがカンボジアで小児の固形がん治療を始めたのは2018年、開院から2年後でした。医療設備も医薬品の調達も、何もかもが日本とは異なる環境。それでも「病気の子どもたちが、生まれた国や経済状況に関わらず必要な医療を受けられる環境をつくりたい」という思いを胸に、日本人とカンボジア人が一丸となり、日本の大学の医療チームなどのご協力をいただきながら実績を積み上げてきました。

そうした中で次第に評判が広がり、各地から患者さんが集まるようになっただけでなく、熱い思いを持った優秀な若手医療者たちが当院を選んで来てくれるようになってきました。

当院では今年度、上半期だけで計45件の小児固形がんの手術を実施しました。これは、日本国内で症例数がトップレベルの医療研究センターが1年間で手がける固形がん手術件数と同じ水準です。こうした環境で数々の手術や症例を経験し、着実に知識と技術を身に付けてきたカンボジア人医療者たち。そうした積み重ねが今回の小児がん手術の成功に繋がりました。これまでは日本から来る熟練の医師たちの技術を学ぶ場だった小児がん手術が、自分たちが先頭に立って判断・進行する場となり、今回手術を担当した3人の医師だけでなく当院で働く医療者全体の士気がより一層高まったように感じています。



開院当初（2016年5月）



現在では100人余のスタッフ・ボランティアが活動  
（写真は今年9月）

ジャパンハートはこの先、2025年にカンボジアに新病院を開設し、いずれはカンボジア人スタッフ中心に病院を運営していくことを目指しています。成長著しいカンボジア人医療者たちとともに、医療を必要とする1人でも多くの患者さんに医療を届けるため、引き続き取り組みを進めてまいります。

## 「初めての医療」を届ける出張診療活動

—ありったけの医薬品と手術機材を車に詰め込み、  
舗装されていないデコボコ道を何時間も走って目的地へ。

ジャパンハートがカンボジアに病院を開設するよりも前、2009年から続けているのが、出張診療活動です。「医療の届かないところに医療を届ける」という理念そのままに、医師や看護師が車で各地を巡回して診療や手術を行います。新型コロナウイルス感染症の影響で一時休止していましたが、昨年からは再び各地に出向いています。

医療の担い手不足が深刻で、保険制度も行き届いていないカンボジア。交通事情や経済的な理由から、人生で一度も病院に行ったことがない、健診すら受けたことがない、という人は少なくありません。医療への不信感も根強く、チラシを配って患者さんを集めるところから地道に活動を続けています。

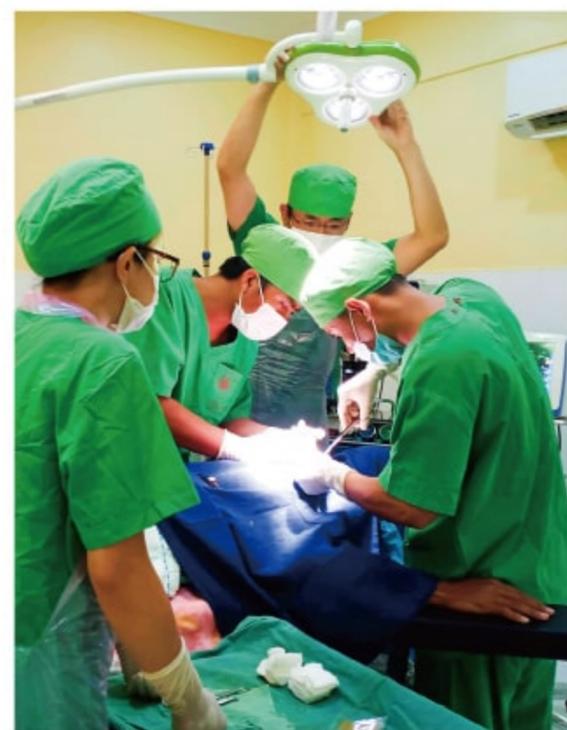
この出張診療活動は日本人医療者の参加希望も多く、患者さんにとって「人生で初めて出会う医療者」になるという日本ではなかなかない経験に、医療者としての原点を思い出させてもらったという感想も耳にします。

そんな日本人スタッフの1人、長期ボランティアとして継続的に活動に参加している外科医の松永明宏医師は、「出張診療では、何十年も炎天下で働き詰めで体中が痛むと訴える患者さんに多く出会います。そうした患者さんの手術に関わり、少しでも症状を和らげられた時、この活動をしていて本当によかったと思います」と話していました。

ジャパンハートの活動の原点に立ち返らせてくれる出張診療活動。

より多くの人に医療を届けられるよう、これからも取り組みを継続していきます。

連携病院で実施した出張手術の様子



## 医師免許取得後、臨床栄養の道に カンボジア人栄養士の思い

「食べ物や栄養は治療の根幹を支えるものなのに、医療現場には正しい栄養の知識を持った人がいないように感じ、この状況を変えなければと思いました」。

そう話すのは「ジャパンハートこども医療センター」のカンボジア人栄養士、ティラさん。学生時代は医師を目指していて、医師免許を取得した後に栄養士の資格を取ったというユニークな経歴の持ち主です。

医学生時代、病院で臨床実習をしていた時に患者さんから食べ物について聞かれても何も答えられなかったこと、そして周りの医師たちも十分な知識を持っていなかったことにショックを受け、「栄養」の観点から医療に携わりたいと考えようになったというティラさん。しかし、カンボジアには医療に関わる「臨床栄養学」を学べる教育機関がなく、医師免許を取得後にタイの大学に留学して資格を取ったそうです。

2021年から当院で勤務を始め、病院食の監修からスタッフや保護者向けのレクチャー、さらには近隣の小中学校での栄養指導まで、精力的に活動しています。

小児がんの患者さんのなかには、口の中に腫瘍ができてしまい、口から食べられなくなってしまう子どももいます。日本であればチューブ（経管）栄養の栄養剤が手に入りますが、カンボジアではまだまだ一般的ではありません。そこでティラさんはミキサーを使って一からチューブの栄養剤を作ることに挑戦。これまでに何人かの患者さんに提供し、体重減少を食い止めるなど、医療チームの一員として栄養面で治療を支えています。

「栄養と医療の連携をカンボジアの医療現場の常識にしたい」と他の医療機関との連携も強化していきたいというティラさん。さらなる活躍に注目です。

## 02 ミャンマー 医療を通じて光を灯す

### 困難の中、一歩ずつ前へ。 医療を通じてミャンマーに光を灯す

ワッチェ慈善病院のあるミャンマー北西部のザガイン管区は、民主化勢力と国軍の衝突が特に激しい地域の1つで、多くの方が家を失ったり避難生活を余儀なくされています。そのような背景もあり、現在ワッチェ慈善病院にはコロナ前を上回る患者さんたちが治療を求めてやってきました。以前であれば政府系病院で治療をされていたような重篤な病気を抱えた患者さんの受診も増えています。このような状況からも、ミャンマーの医療体制がクーデターから2年以上経った今でも厳しい状況に置かれていることが伺えます。

衝突や戦闘の起こっている地域が少しずつ拡大し私たちの活動地に近付いてきているのを感じながらも、私たちを頼ってやって来る患者さんたちのためにも活動を継続するべく、安全面には細心の注意を払いながら医療活動を継続しています。



日本人専門家による手術も実施

ワッチェ慈善病院から車で1時間ほどの場所にある国立子ども病院では、今でも続く医療者のボイコットによって、子どもたちに十分な医療が提供できない状況が続いています。小児がんの子どもたちに対して抗がん剤治療はできても、その後に必要となる手術が外科医が不在のためできないのです。そのため今年1月にワッチェ慈善病院で小児がんの手術を開始してからは、毎月のように子ども病院からの紹介で小児がんの患者さんがやって来るようになりました。

そのような患者さんたちに対し、ワッチェ慈善病院で対応できる症例に対しては医療者一丸となって治療に当たっています。ただ、まだまだ小児がん治療の経験が浅く、医療設備も十分ではないため、ここでの治療は難しい症例もあります。それでも、ここまで辿り着いてくれた子どもたちを1人でも多く救いたいとの思いから、今年7月からはカンボジアの「ジャパンハートこども医療センター」への、ミャンマー人2名の患者さんの搬送治療を実施しました。



ワッチェ慈善病院の手術室で手術を待つ子ども



ワッチェ慈善病院の患者さんに家族が付き添い、回復を祈る

「ミャンマーの病院では十分な治療が受けられず、親としてとても不安な日々を過ごしてきました。私たちはジャパンハートに出会えて、本当に運が良かった。でも一緒に治療を受けていた子どもは亡くなってしまいました…」と涙ながらに話してくれたのは、ミャンマーからカンボジアに渡って手術をうけたプエプエちゃんに同行したお母さん。

手術後のプエプエちゃんとお母さん

プエプエちゃんは「ウィルムス腫瘍」という腎臓のがんが再発し、抗がん剤治療を受けながら手術の機会を待っていたところ、国立子ども病院の医師に紹介されてワッチェ慈善病院にやって来ました。がんの再発ということで、手術時のリスクを鑑みて体制の整ったカンボジアでの治療となりました。

ミャンマーにはプエプエちゃん親子のように、どうしようもない不安を抱えながら治療を待つ患者さんたちが、まだまだ多くいます。今のミャンマーの厳しい医療状況の中で私たちにできることは、まずはこうやって来てくれた患者さん1人ひとりの想いに寄り添って、最大限の医療を提供すること。これからもミャンマーの医療に1つひとつ光を灯していきます。



## ミャンマー専門医療プロジェクト

「日本の先進技術でミャンマーの子どもを救う」ことを目指し、各分野の日本人専門家の協力で年間200名以上の子どもたちに高度医療を提供してきたこのプロジェクト。ミャンマー国内の情勢により中断が余儀なくされてきましたが、昨年の口唇口蓋裂プロジェクトに引き続き、今年7月には小児外科専門医2名を招き、約3年ぶりにヤンゴン市内の小児専門病院での手術活動を再開しました。

4年前には日本とミャンマーの医療者がタッグを組んでミャンマー初の小児生体肝移植を成し遂げたこの病院も、残念ながら医療人材の不足によって以前は救っていたはずの命が救えなくなっていました。そのような厳しい状況の中で、昼夜問わず対応にあたっているミャンマーの小児外科医たちの負担を少しでも軽減すべく、現在の状況下では対応の難しい症例の手術を、現地の若手医療者と共に実施しました。日本人専門家の技術を少しでも学ぼうと、真剣に術野を見つめる様子が印象的でした。また今後は、心臓病を持った子どもたちも救うべく、準備を進めています。

医療体制が崩壊した今のミャンマーでは、高度な医療技術を必要とする疾患を持った子どもたちを救うことは難しくなっています。そのような中で、先進技術を持つ日本人専門家の協力によって救える命が1つでも増えるのであれば、難しい状況ではありますが私たちはそれに挑戦し続けます。

## Dream Train

### 答えはいつも、自信を胸に羽ばたく 子どもたちの中に

ジャパンハートがミャンマーで運営する養育施設「Dream Train (ドリームトレイン)」は、貧困や家庭環境により、資質や能力があってもチャンスを得られないミャンマー全土の子どもたちの希望・目標の地になりたいと考えています。そのためには、今ここにいる一人ひとりの夢を叶える力が開花する場所になること、そしてミャンマーの次世代を担う子どもたちを育てることが、最も重要な課題です。

今年は、この思いにご賛同くださったプライベートスクール二校の協力により、昨年よりも17名多い24名が、奨学金生として私立の小中高校に通っています。施設内では、思いやりと共感力を育むために、日常生活の中に様々なチームアクティビティーを取り入れました。掃除や料理、季節ごとの飾り付けや規則決めなど多岐にわたるイベントには、スタッフも必ず参加し、子どもたちと共に悩み、喜び、達成感を共有します。他者と協働してゴールを目指す楽しさを経験することで、人への信頼感を持って社会で活躍できる人材が育つと考えています。

子どもたちの成長と向き合い施設の進化を追い求める中で、私たちは常に「今、最善の選択ができているのか」と自問自答を続けています。時には迷い、葛藤することもあります。いつも答えをくれるのは目の前にいる子どもたちです。今年10月には、2010年にミャンマー東部のシャン州から入所し、これまで独学で絵を描き続けてきた男の子が、念願の芸術大学に合格するという嬉しい出来事がありました。彼が挑戦の末に「好き」を追求できる環境を自らの力で手にしたことで、自信を育み、一人ひとりの力を最大限に引き出すための基盤を作ることがいかに大切であるかを再認識できました。なお、そんな彼の描いた絵がラベルに使用された「Dream Train Connected Coffee」を販売中です。彼が自信を持つきっかけになったドリップコーヒーのデザインは、ぜひこちらのQRコードよりご覧ください。



## 03 ラオス 新たな門出

### 技術移転の完了を目指して

2023年9月14日、ラオス・ウドムサイ県にて、甲状腺疾患治療事業並びに技術移転プロジェクト（以下、甲状腺プロジェクト）の第2期開始を受けたキックオフミーティングが開催されました。

東南アジアの内陸国であるラオスでは、日本なら海藻などから自然に摂取しているヨウ素が不足しがちで、それが甲状腺疾患の発生につながっていると考えられています。2018年に開始した甲状腺プロジェクトは、昨年（2022年）、第1期のプロジェクトが無事に終了を迎えました。しかし、ウドムサイ県をはじめとするラオス北部には、甲状腺疾患を抱えて暮らす患者さんがまだまだたくさん残されています。1人でも多くの患者さんを治療し、幸せになっていただくべく、私たちは新たに第2フェーズとしての活動を実施していきます。

NGOがラオスで活動を行うことは、実はそんなに簡単なことではありません。活動を行うためにはまず、ラオス政府との覚書を結ぶ必要があります。審査機関は約8カ月から、長いと1年にも及ぶことも。厳格な審査が行われ、承認が下りた後に、冒頭のキックオフミーティングが行われて、ようやく私たちは患者さんに医療を届けられることになるのです。

良性の甲状腺疾患は、生活に不便はありますが、直接命に係わる病気ではありません。ジャパンハートが行っている他の活動と比べると強い印象を残すようなエピソードも少なく、私たちに支援し、このニュースレターを読んでくださっている皆様の中にも、「カンボジアの小児がん治療やミャンマーのワッチェ慈善病院での活動は知っているけど、ラオスの活動はよくわからない」と思った方もいるかもしれません。それでも私たちは、2018年からずっと、地道にこの活動を続けています。

それはなぜか。答えは単純で、甲状腺疾患に苦しんでいる患者さんと、それを救いたいと思っている現地人医師たちがそこにいるからです。



キックオフミーティングには、各局、各省の要人や、地域を担当する警察官、一緒に活動を行う病院スタッフなどが参列しました。



11月に行われる第1回手術活動開始に向けた、事前診療の様子

たとえ今すぐ命に危険がある病気ではなくても、目の前の患者さんがそれを苦しんで、治療によってより幸せな人生を過ごすことができるのであれば、そこに全力を尽くすのが、ジャパンハートの考える医療のかたち。だからこそ私たちは、日の目を浴びることが少なくても、甲状腺プロジェクトに全力を注いでいるのです。

今回新たに始まる第2フェーズでは、日本の「内分泌外科学会」の先生方に手術活動のご協力をいただけることになっております。甲状腺疾患を専門とする先生方にお越しいただくことで、より専門的な知識や手技を現地の医師に注ぎ込むことができるようになるわけです。甲状腺プロジェクトは、現地人医療者の育成（技術移転）も、1つの大きな目標として掲げていますから、こうしてご協力を賜れることは、何よりも大きな力となります。

現時点では、第2期の活動をもって、ジャパンハートとしての甲状腺プロジェクトは終了し、そのあとは現地の医療者たちが自らの手で甲状腺治療を続けていける体制まで作り上げたいと考えています。そのためには、プロジェクトの実施中に、今はまだ難しいレベルの手術でも問題なくこなせるレベルに到達してもらわなければなりません。その一方で、手術が患者さんの命を預かるものである以上、無謀な挑戦はできません。地道な活動の積み重ねとはなりますが、彼らの成長を後押ししながら、患者さんの幸せを一つずつ増やすための活動を続けていきます。

## 04 国際緊急救援(iER)

### 九州北部の豪雨災害で 久留米市に人的・物的支援

ジャパンハートの国際緊急救援チームは、2023年7月上旬に九州北部で起きた豪雨被害に対して、看護師2名を派遣し、支援を実施しました。

7月10日から断続的に発生した線状降水帯により、久留米市に大きな浸水

被害が発生。ジャパンハートでは現地調査と自治体等への支援ニーズのヒアリングを行い、特に被害の大きい地区の中核病院で外来や手術室を含む1階の機能が停止している状態との情報を受け、まずは病院機能の回復に向けた医療機器の清掃と支援物資の提供を中心とした活動を、病院スタッフおよび現地ボランティアとともに手掛けました。

私たちが到着した際、1階には泥水に浸かって汚れた医療機器が残されていました。医療機器は専門的なものも多いことから、「これは使えるのかどうか」の前に、「何に使うのか」といった知識がなければ、すべて破棄することになりかねません。その結果、経済的な被害が拡大し、診療体制の復旧までにより長期の時間を要することも考えられます。その意味では、専門職による清掃活動は減災にもなるという見方もできます。

今回、被災病院の清掃というこれまでになかった支援活動を通して、医療者による被災地への支援の多様性を改めて考える機会となりました。看護師が支援に入ると聞けば、医療的ケアのサポートをイメージされる方も多いのかもしれませんが。しかし、現場のニーズに寄り添い視点を変えることで、新たな支援の可能性が広がり、地域医療のレジリエンス(回復力)を高める介入にもなることを実感しました。災害が起きないこと、それは誰も望むことだと思います。しかし、もし起きてしまったならば、少しでも被害が少なく、少しでも早い復興を。それができるような活動を目指していきます。

被害に遭われた皆様の日常への復帰と、地域社会の一日でも早い復興を、心よりお祈り申し上げます。



## 05 スマイルスマイルプロジェクト

### 「もう一度、思い出の場所につれてってあげたい」

#### 小児がんのお子さんとそのご家族の生涯深く心に残る思い出の時間をサポート

スマイルスマイルプロジェクトでは、一人ひとりのお子さんに合わせた「準備」を最も重視し、時間をかけて取り組んでいます。

旅行前には面談を行い、お子さんとご家族と一緒に必要なケアを考えます。旅行先でお子さんの体調に変化があってもすぐに対応できるように主治医や看護師と連携し、対応をお願いできる病院も必ず選定しています。外出先で医療的ケアが必要な場合は、家族の不安を最小限にできるように施設や宿泊先、交通機関と情報交換し受け入れの準備をお願いしています。

こうした綿密な準備の甲斐あって、多くのご家族に安心して楽しい時間を過ごしていただいています。

この10月にディズニーシーにお連れしたご家族より届いたお手紙を紹介します。

去年11月に発病、自宅療養を続けていた5歳の娘。

「ディズニーシーに行きたい!」という娘の言葉を思い出し、スマイルスマイルプロジェクトに依頼をしました。旅行の計画が進む中、症状は日々変化し、家族の不安が強くなったときも、スタッフの方に親身になってご提案いただいたことで、旅行を決断することができました。

看護師さんのサポートが常にあるという安心感。こんなにも穏やかに、安心して、心から楽しんで外出できたのは久しぶりでした。娘も大好きなディズニーシーでは、少し目を開けたように思えました。大好きな場所の空気感や音楽をきっと楽しんでくれたはず。子どもたちの誕生日をディズニーシーでお祝いしたいという私たち家族の思い。医療者としての適切な判断も持ちつつ、全ての希望を叶えていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

また、この旅行にご協力いただいたボランティアの方々、支援者の皆様へこの場を借りて御礼を申し上げます。スマイルスマイルプロジェクトを利用して本当に良かったです。



# 06 ジャパンハート アジア小児医療センター建設プロジェクト

## クラウドファンディング 1億2,000万円達成!皆様、ありがとうございました。

5月27日から9月30日までの4カ月間開催していたカンボジア新病院向けクラウドファンディングは、皆様の暖かなご支援のおかげをもちまして、のべ1046人の方より、総額1億2,587万5,100円のご寄付をお寄せいただきました。

改めまして、皆様のご支援に感謝いたします。

皆様に今回のクラウドファンディングの意義をより深く理解していただくため、吉岡秀人や現地で活動するジャパンハートのスタッフのほか、ジャパンハートを応援いただいている支援者の方々のお力をお借りして、オンライン、オフラインでのイベントも複数開催いたしました。ジャパンハートのスタッフにとっても、「私たちの社会で果たす役割」をあらためて実感する機会となりました。



### 新病院公式サイトOPEN!

「ジャパンハートアジア小児医療センター」について詳しくは左のQRコードからご覧ください。

## 世界のために、日本のために — 新病院が果たす役割

「カンボジアに病院をつくる」というと、日本が一方向的に発展途上国を支援するというイメージがあるかもしれませんが、もちろん、慢性的な貧困に苦しむ子どもたちを救うことが新病院の第一の目的ではありますが、私たちジャパンハートは日本発祥の団体だからこそ、新病院で日本国内の医療課題をも解決したいと考えています。

日本にはおよそ3,000人の小児外科医がいます\*1が、15歳未満の人口が日本とほぼ同数のミャンマーには、専門医が15名ほどしかないと言われていています。すなわち、ミャンマーにおける小児外科医1人当たりの治療機会は、極端に言えば日本の約200倍。見方を変えれば、少子化の進む日本の医師にとって、専門医の少ない開発途上国は、医師として経験を積み成長する場になり得ます。本プロジェクトは、多くの子どもがいる一方で専門医が少ない開発途上国と、子どもが減少していることから人材育成機会が失われている日本の課題を組み合わせることで、両国にとって互いに意義があるものになると考えています。

また他方で、現地の医療人材を育成することも非常に重要であると痛感した出来事が、新型コロナウイルス感染症の拡大とミャンマーにおけるクーデターでした。いずれも日本からの渡航が制限されたことで、私たちは改めて現地の医療スタッフの成長と自律的な病院運営が、持続可能な医療活動には欠かせないと実感するようになりました。カンボジアに新設する病院では、クーデターの影響が未だ色濃く残るミャンマーや、いまだに経済成長が立ち遅れているラオスから、患者さんだけでなく医療スタッフを積極的に受け入れ育成することで、日本と東南アジア全体の医療水準の向上に寄与できると考えています。

ジャパンハートの持続可能な支援の形とは、カンボジア・ミャンマー・ラオスといった開発途上国と日本が対等に相互の課題を補完し合い、切磋琢磨することで、互いにとって発展性のある活動を行うことなのです。

日本を含む各国から医療従事者が集まり、ともに成長しながら世界の子どもたちの命を等しく守ることを目指す高度医療拠点「ジャパンハート小児医療センター」の設立を、これからも応援していただければ幸いです。

\*1 一般社団法人 日本小児外科学会での会員数

特定非営利活動法人ジャパンハート

〒111-0042 東京都台東区寿1-5-10 1510ビル 3F  
電話:03-6240-1564 (平日10:00-17:00/土日祝除く)

